家庭、保育所、幼稚園（一）

倉橋惣三

家庭は幼児保育のもとである。初めであると共に、源である。源の完きを得ざれば末の完きを期し得ない。しかも人生のこと容易に完を望み得ない。これを補うに故意修飾を以てすれば、家庭生活の本然の尊さを害い易い。元来家庭は人間至情の生活の場である。意識の生活は屢々本然を破るに偏し易きがゆえであり、故意に傾くこと多きがためである。日常朝夕のうちに幼教を風化薫染するものが家庭の空気である。しかも、すべての親は君子聖者と限らない。況んや朝夕不用意の間に過誤失錯なしと限らない。故に、家庭に教育の理想郷を築することは難い。美より寧ろ、つくろいなきを以て家庭の真とし美とするか。朝に争い、夕に和し、時に乱し、時に侮。朝は子に弄戯、夕には親に溯うことあり、雑然として、規矩をみだし、準繩の整いを素す。電話は必ずしも佳語を告げず、ラジオはまして俗調に謹厳をかきみだす。決して、君子の郷を以て居ないのである。しかも、美の中に、人間の家庭生活があり、人間の家庭の教育があるといえよう。少くも、その間に人間が養われるものと考え得られようか。但し、家庭教育のかく限界を言うは、以て教育の心をゆるやかにする所以ではない。かゝるがゆえにこそ、家庭だけでは足りないといわれるのである。社会と国家との教育的責任が生ずるのである。

というのは、家庭の子を我子でないと言いきろうとするのではない。況や、幼児教育における家庭の位置を極少価しようとするのではない。――教育はやはり教育意志の仕事だということを強調したいのである。誤りなき幼児教育は決して自然にできるものではない。いわば、細微の研究と用意とを以て、大乗のセンスに裏づけ、初めて過ちなきを得るものである。

然らば家庭の教育的欠陥はどこから起るであろうか、貧がその一つである。両親の多忙がその二つである。親の病弱がその三である。両親の不和はその五にして最大になるものである。これらに比して、外的理由であるが、環境殊に住居、家業の種類、――挙げてゆけば多いが、親の精神動揺はその最大にして最深きものである、と共に更に親の神経過敏、殊に教育的過敏も侮るべからざるものがある。つまり教育的意識の過渡である。

然れども、家庭の弊が如何に多くある場合にしても、無家庭の如く憂うべきはない。親の愛はすべてを覆う。親の愛なければ、万の好条件ありと雖も、恐らく無家庭にひとしい。僅に細部の欠陥を補い、些か親の愛を補うものに社会的児童福祉施設ある。謂うところの保育所（託児所）及幼稚園がそれである。その始めと発達はいろ〳〵であるがその心は一つである。

保育所、その起源は国によっていろ〳〵である。その一つは母の貧窮と過労とから、母乳育の不足を補う目的を以て牛乳の供給をすることがその初めであった。その為、廉価にして純良なミルクプラントの増設が社会的に（国家的）に企てられた。またイギリスにおいては、特に病弱なる母子の保護が企てられその施訪が、テームス上流に建てられた。特にその為のセットルメントはその著しいものであった。又ヴイクトリヤ女王の特志によって設けられた、ヴイクトリヤハウスは最完備せるものであった。即ち初期の託児所は主として栄養保護が主目的であった。即ち育児保護であったのである。

その後社会的児童保護事業の発達と共に、次第にその対象美を加え、単に哺育の時期のみならず教育の年頃に及んだ。あらゆる年令にそれにふさわしい教育の必要はいうまでもない。とくに哺育の場合程単純でないだけである。

殊に極貧家庭の子らの場合には、その成熟の早きと啓り時間とから、その教育的望処は普通家庭の子よりも複雑になる。教育的望処の必要な所以である。殊にそういう環境のように教育的細心の必要は多い。不良少年問題に憂慮する人々の早くから憂慮するところである。即ち育児問題において幼児期と乳児期とを区別することの困難なる所以である。